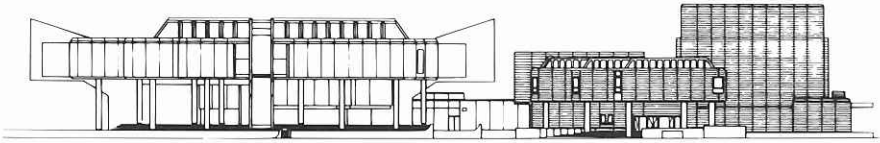
ヨコヤマオウムガイ化石

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM
28 February 1996
No. 112



平成７年度博物館・美術館講座
世界のやきもの－２万年の流れ－

佐賀県では今年、世界・炎の博覧会が開催され、「文明とやきもの展」という大規模な展覧会が開催される予定になっているが、本講座では「世界のやきもの－２万年の流れ－」と題して、その内容の一部を紹介するものである。その概要を以下に記することにする。

１文明のあけぼのとやきもの

やきものは原理的には、可塑性のある粘土を焼くことによって、かたくして、用をたすようにしたものである。その性質上、けっして腐るものではなく、長い年月にわたってその姿を保ち続けるものである。もし割れたとしても、また長い間、土に埋もれていても遺存する。それは木や金属とは異なる点である。従って、長い人類の文明の流れを見るのにやきものは非常に有用であり、謎を説き明かす鍵となる。それは逆にやきものを通して見た文明史論への試みともいえよう。

それでは世界最古のやきものとはどんなものであったのだろうか。やきものは一般に言われるように土と炎の産物である。神話の世界でも、プロメテウスが神から火を盗み、人に与えた。また旧約聖書にも神が土から人間を作ったと記述されており、中国の神話の中にも同様に、洪水の後に水たまりができ、その水たまりの土から人が作られたとする話が残されている。火の使用は実際には偶然の結果であろうし、また土をこねて物を作ることも人類の知恵の発展の上で当然のことであるといえようが、やきものが成立する際の何らかの示唆を与えてくれるものである。

現在、知られている世界最古のやきものは、スロバキアで発見された約２万年前のテラコッタのヴィーナスであり、動物をかたどったものである。もちろん石を削ったり、磨いたりして人や動物を作ったものはそれ以前にもあるので、これらのテラコッタはそうした原始アニミズムの流れの中でのことである。それでは我々が普通やきものと呼ぶ器の形をした最古のやきものとはどんなものであったか。それは驚くべきことに約１万年前の日本の縄文式土器であり、佐世保の泉福寺洞穴出土の豆粒文土器などがあげられる。陶磁研究家の中にはこのことをさして、世界最古のやきものを縄文土器とする見解もある。

２四大文明とやきもの

メソポタミア、エジプト、インダス、黄河の四大文明にはそれぞれ特徴的な陶芸文化が存在する。メソポタミア文明はチグリス、ユーフラテス両川にはさまれた肥沃な土地に高度な文明が築かれ、紀元前6000年の最古の彩文土器が焼かれたが、それ以外は煉瓦が焼かれた程度であまり見るべきものは無い。それに比べてエジプトでは紀元前4000年頃から赤色、黒色の土器が作られ、多くの土器が使われた。当時の壁画などには水や穀物を入れる土器が多数描かれている。ヨーロッパ文明の源流は、このエジプト文明とメソポタミア文明とに発し、地中海文明、ギリシャ・ローマ文明へと引き継がれていくのである。イギリスの大英博物館やフランスのルーヴル美術館、アメリカのメトロポリタン美術館など欧米の博物館が、ギリシャ・ローマ時代の美術品のみならず、エジプトやメソポタミア文明の遺品を数多く収集しているのは、そのことをよく表している。またインダス文明ではハラッパー、モヘンジョ・ダロなどの遺跡から土器の出土が見られるが、やきものの生産はあまり盛んではなかった。一方、中国は古代から世界のやきもの文化の主流を占めてきたが、黄河文明でも仰韶期に紀元前5000年にすでに彩陶が作られている。

ヨーロッパ文明の源流ともいうべき古代ギリシャでは多くの土器が作られた。黒絵式、赤絵式と呼ばれるこれらの土器はアンフォーラ、クラテールなど定式化された器形で、多く神話などに主題を求めた文様が多く描かれている。壁画など絵画資料の少ない古代ギリシャにあって土器に描かれた文様はそのまま絵画の歴史を追うことのできる貴重な資料である。

３東洋陶磁の美－中国・朝鮮・日本－

中国は常に世界のやきもの文化をリードしてきたが、特に宋・元・明・清のやきものは“東洋の

宝石”と称され人々の垂涎の的であった。仰韶期、龍山期から殷（商）、周、秦、漢、唐と続く中で殷のように青銅器文化が隆盛を極め、土器が脇役の時代もあったが、各時代を通じて多種多様なやきものを作り続けた。ここでそのすべてを説明することは難しく、他の機会に譲りたい。

中国陶磁は唐三彩の時代に国際性を帯びるにいたる。それ以前は基本的には墳墓の副葬品などの明器である。中国陶磁はその優秀性ゆえに商品として世界規模で流通したのである。それに比べて朝鮮や日本など他の東洋のやきものは世界的な主流にはなりえず、小規模な流通にとどまった。それでも朝鮮の高麗青磁の優秀さは世界的にも知られているし、日本の縄文土器、特に火焔型と呼ばれる土器は原始美術の最高峰であるという評価も得ている。日本の陶磁においては、縄文土器に加えて、瀬戸や常滑などの六古窯と呼ばれる中世陶、また楽や志野、織部などの桃山陶は多分に日本的な表現といえ、和、和様、和風に通じるものである。また磁器である伊万里や鍋島、古九谷、京焼などもその優秀さが知られている。

4 イスラム世界とヨーロッパ

7世紀はじめにイスラム教が興隆し、西アジアから北アフリカ、イベリア半島にまたがる強大なイスラム帝国が成立すると、世界のやきもの文化に一つの大きな流れが生じる。イスラム陶器の特色はラスター釉などの釉薬の開発、白釉多彩陶の多様な展開などにみられるが、それは多彩な色の世界を生み出し、またそれにもましてモスクを飾るおびただしい装飾タイルは見る者を圧倒し、やきものといえば食器を思い浮かべる我々に一種のカルチャー・ショックを与えるものである。

イスラム陶器の発達の背景には、イスラム世界の理化学の発展があげられるが、それにもまして中国陶磁の影響が大きい。イスラム世界が東洋と西洋を結ぶ交通路にあたり、文化の交流にも大きな役割をはたした結果に他ならない。そしてイスラム陶器が成熟していく中で、ヨーロッパの陶芸にも大きな変化が生じてくる。13世紀ごろから出現する“イスパノ・モレスク”（イスラム系スペイン美術）と呼ばれるスペインの陶器はその後のヨーロッパの陶器の基盤となっていくのである。そして、イタリア・マヨリカ陶の隆盛や中世ヨーロッパからの系譜である器の生産があいまって15～16世紀のヨーロッパ陶芸を形成した。

5 陶磁の東西交流

一般的にいわれる陶磁の東西交流は17～18世紀にオランダの東洋貿易によってもたらされたヨーロッパ向けの中国陶磁や肥前陶磁、さらにその東洋陶磁の影響を受けて作られたヨーロッパ陶磁をさしているが、広い意味での東西交流とは前述の中国陶磁からイスラム陶器、さらにヨーロッパ陶磁へという何世紀にもわたる大きな陶磁文化の流れである。

肥前の柿右衛門や古伊万里は17世紀後半からオランダ東インド会社の手によってヨーロッパにもたらされ、日本の陶磁の歴史上はじめて世界市場に登場したやきもので、しかもヨーロッパの磁器焼成に大きな影響を与えたということで重要である。

6 南北アメリカの陶磁

アメリカ大陸でのプレコロンビア陶器はアフリカやオセアニアの陶器と同様に、孤立した文明の中で独自に発達したもので、一種のプリミティヴ美術であり、フォーク・アート（民族芸術）である。ここに見られる単純強烈な表現、また神秘性は、人間性の原点にまで遡るもので、その意味で多分に現代性を持つものである。やきものの造形の根源に関わることで、注目に値するものである。

7 近代の幕開け

やきものの近代化をどうとらえるか。ここでは近代以降のやきものの流れをふたつの側面から追うことにする。それは、やきものの工業化と個性化という側面である。やきものの個性化は陶芸作家、アーティストの作る作品であり、工業化はマスプロダクションの製品であり、デザイナーの介在する世界である。もちろん、その中間的な生産形態はあるが、このふたつの側面はやきものの将来を考える上で重要な問題である。

（学芸員　宇治章）

エッセイ

枝吉次郎書簡についての一考察

偶然、枝吉次郎の書簡を手にする機会を得た。縦16.2cm・横50.2cmの和紙に墨書きで認められ、幾重かに折り畳まれて、紺色の色彩で花や大根などの模様をほどこした封筒(縦17.2cm・横4.8cm)におさめられている。書簡の上部や封筒に虫害は見られるものの、保存は比較的良い状態といえる。あわせて写真も掲載するが、ここにその全文を挙げる。

(封筒)

(表)

島圃右衛門様

福地彦太郎様　　枝吉次郎

□信

(裏)

緘　　従京師(州ヵ)

(書簡)

梅雨之候、弥御安康可被成御座、珍重奉存□候、

此事御國元ニハ大秘事也

猶龍種者、二月末ころより病弥罷在、東遊之事も終不任本意候、乍憚左様御承知被下度候、

目暈手ふるひ不能細書候、恐惶謹言、

五月十五日　　枝吉次郎

島圃右衛門様

木原義四郎様

福地彦太郎様

御侍史

書簡の主枝吉次郎(龍種)は、言うまでもなく、若き日の副島種臣(1828～1905)その人で、のちに佐賀藩士副島家の養子となった。

昨年、副島種臣の末裔にあたる御家から佐賀県立博物館に寄贈された資料中に、おそらく同時代に認められたと思われる父母・兄弟宛ての枝吉次郎龍種書簡があるが、「枝吉」「龍種」の署名や「恐惶謹言」の書体、その他、書簡中数か所に見える癖字の書し方などに共通したところが多く、しかも字体にためらいもないことから、枝吉次郎自筆の書簡と見てほぼ疑いない。

さて、ここに紹介した書簡であるが、若き日の副島種臣が、知人の島圃右衛門・木原義四郎・福地彦太郎の三名に宛てたもので、概容は、副島が長期の病床にあるため、江戸へ向かうことがままならず、また、筆の運びも思うにまかせぬことを嘆くかたちとなっている。

三名の知人のうち、島圃右衛門はのちに北海道開拓の主導人物として名をなした島義勇(1822～1878)、また、木原義四郎は、藩校弘道館の教授となり、のち島とともに佐賀の役で憂国党に参加した木原隆史(1828～1879)である。しかも、島圃右衛門・木原義四郎ともに種臣にとっては母方の従兄弟でもある。

福地彦太郎については、種臣の兄枝吉神陽が結成し、種臣・島圃右衛門・木原義四郎らが参加した佐賀勤皇党の拠り所というべき義祭同盟の、安政５年(1858)連名簿中に名を連ねているが、佐賀の役の憂国党の一員福地常章(1833～1877)との関係については判然としない。

いずれにせよ、当時、種臣と最も近い関係にあった知人達であることは間違いないと思われる。

それでは、この書簡は、一体、いつの頃認められたのであろうか。封筒裏面の記載は、「従京師」と読めるので、枝吉次郎が京都滞在中に認めたものと考えられる。種臣が養子となって副島を名乗るようになるのは、安政６年(1859)31歳の時であるので、この書簡はそれ以前の「枝吉」を姓とした時代のものであることは疑いがなく、はたして、この時代、種臣が京都に遊学したのは、嘉永５年(1852)～同６年(1853)と安政２年(1855)～同５年(1858)の２度である。しかし、この時期、種臣の京都での行動等については判然とせぬ点が多く、上記の年代のうち、どの階段で認められた書簡かについても、種臣を論ずる諸本からは推定することはできない。

ただ、この書簡中の文言には、年代を特定させるためのいくつかのヒントが隠されている。

たとえば、この時、種臣は「二月末ころより」

書簡を認めた「五月十五日」にいたってもなお「目暈(めまい)手ふるひ不能細書候」という如き大病を思っているが、彼は書簡中に添え書きとして「此事御國元ニハ大秘事也」という文言をのこした。つまり、「この大病のことは国元には内緒だぞ」との意味である。宛名人の島・木原・福地が佐賀の地にあるとして、あえて国元と認めるであろうか。

書簡はさらに「東遊之事も終不任本意候、乍憚左様御承知被下度候」と続く。「江戸の方面に旅行することも終に意に任せぬままとなった。申しにくい事だが、そのように御承知下さい。」ということである。このことは、島・木原・福地の三名が江戸にあって、種臣が「東遊」することを待ちわびているようにも読めないだろうか。

この書簡の年代を特定するカギはここにある。

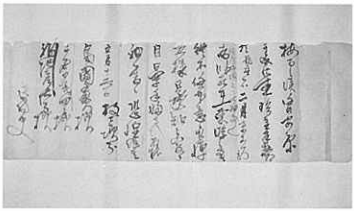
それでは、島・木原・福地の三名が国元を離れ江戸に滞在したのはいつ時分だろうか。

福地彦太郎については、前述のように、現在の段階では不明確な点が多い。

木原義四郎は、確かに一時期、江戸昌兵黌に学び、尊皇論を唱える水戸の藤田東湖の門をたたいたことなどが『佐賀先哲叢話』に見えるが、一体いつ頃江戸に滞在したかについては明確にし得ない。ただ、藤田東湖は、安政2年(1855)10月2日江戸を襲った大地震で圧死するので、木原が江戸に遊学したのはこれ以前からということになる。

島圍右衛門については、佐賀の藩校弘道館卒業ののち、弘化2年(1845)〜同4年(1847)にかけて諸国を遊学するが、その後は先の安政の大地震直後に江戸に向かい、佐賀藩邸の大広間詰めを命じられている。また、翌安政3年(1856)9月には、藩主鍋島閑叟より蝦夷地の探検を命じられ江戸を出発、約1年半の探検行を行なった。島が探検を終えて佐賀に帰るのは同5年正月のことである。

以上から考察すれば、この枝吉次郎の書簡の認められた時期は、島と木原が同時に江戸に滞在している可能性からして、安政3年(1856)以外にはないと思われる。



種臣が二度目の京都留学をする前年の安政元年(1854)、江戸幕府はついに200年余の鎖国の制を解き、米国をはじめ西洋諸国と和親条約を締結、日本近海にはいよいよ外国船が公然と姿を見せ、世情騒然となった。開国論と攘夷論、佐幕派と勤皇派の対立は当時の国内情勢に大きな混乱を惹起した。

そうした中、再度上京した種臣は、動乱の渦中にあって、さらに江戸への遊学を望んだ。そこには、佐賀時代の義祭同盟以来の盟友が滞在していた。幕府の膝下である江戸の混乱の様子を見たい。勤皇を想う種臣の心も大きく揺れ動いたであろうことは想像に難くない。

しかしながら、種臣は結局、病の床にあり、宿願の江戸遊学は果たせずじまいとなった。

種臣がこの後、江戸に向かうのは、5年後の文久元年(1861)暮れのことだが、しかしまた、その途上、江戸の赤羽で落馬、重傷を負って翌年早々には佐賀まで駕籠で送還されている。種臣の言葉を借りれば、その結果、「御一新まで私ちょっとも江戸の事は知らない」(『副島伯経歴偶談』)ということになった。

この書簡を認めた安政3年(1856)といえば、種臣二十八歳、若き志士の苦悶の声が聞こえてくる。

(学芸員　川副義敦)

常設展案内

佐　賀　の　化　石

佐賀県北東部の厳木町・相知町付近から南西部の有田・嬉野町付近にかけて、新生代の古第三紀と呼ばれる時代に形成された推積岩が広く存在しています。

堆積岩の存在は、当時その付近が浅い海であったことを意味しています。中でも約４０００万～２０００万年前にかけて形成された堆積岩の中には、古生物学的記録（化石）が豊富に含まれていて、当時の豊かだった海の古環境を知ることができます。

今回は、常設展で展示する化石の中から代表的なものをいくつか取り上げて紹介します。

1　ヨコヤマオウムガイ（表紙写真）

産出地は北波多村稗田。直径42cmで、欠損のない完全なオウムガイ化石としては日本最大のものです。日本における古第三紀のオウムガイ化石は、九州と北海道で見つかっていますが、その大部分が佐賀県、長崎県、福岡県、熊本県で見つかっています。これまでに佐賀県からは、10カ所以上で40個体以上が発見されており、オウムガイ化石は佐賀県を代表する化石と言えるでしょう。

現生のオウムガイ類は、約５億年前からその形態をほとんど変えることなく生き続けてきた「生きている化石」と呼ばれており、フィリピンのルソン島以南の南太平洋からインド洋の亜深海（水深１００～６００m）に生息しています。その死がいは浮遊性があり、黒潮によって遠く離れた日本までたどり着くことがあります。

この現生種の生態から、化石で発見されたオウムガイが、当時の佐賀県に生息していたか、南方の海から死がいが漂流してきたかは判断が難しいところです。しかし、オウムガイ化石と同時に発見される二枚貝化石から、その場所が当時３０m以深であったことと、化石の良好な保存状態、高い産出密度などから、佐賀県に生息していたことが十分に考えられます。

カラツキリガイダマシ

2　カラツキリガイダマシ

佐賀県の地名、唐津の名前がつけられた細長い巻き貝。生物の名前には、最初に発見された地名が用いられることが多く、この名前もそのような例でしょう。

写真は、杵島郡江北町の今から約３６００万～３７００万年前に堆積した杵島層と呼ばれる比較的古い地層から発見されたもので、カラツキリガイダマシはこのように集団で化石化したものが多いようです。潮の流れが速いところでは、細長い貝殻が流れに平行に並んで化石になるため、当時の潮の流れを知る手がかりになることがあります。

マツラワスレガイ化石

3　マツラワスレガイ

佐賀県の地名、松浦が名前に用いられています。写真は、杵島郡江北町の佐里砂岩層と呼ばれる地層から発見されたものです。二枚貝のハマグリに近い種類で水深２０～３０mの砂～シルトの海底にすんでいたと考えられています。

（学芸員　中原正登）

佐賀県博物館協会

平成6年5月9日、佐賀県博物館協会が設立されました。当協会は佐賀県内の「博物館、美術館、歴史民俗資料館、その他これに類する施設」（会則第1条）によって組織されました。現在加盟館は33館。年1度『佐博協通信』が発行されます。

施設名	所在地	電話	開館年月日
〈県　立〉			
1　佐賀県立博物館	佐賀市城内1-15-23	0952-24-3947	S45.10.14
2　佐賀県立美術館	佐賀市城内1-15-23	0952-24-3947	S58.10.8
3　佐賀県農業試験研究センター資料館	佐賀郡川副町南里1088	0952-45-2141	S44.4.1
4　佐賀県立名護屋城博物館	東松浦郡鎮西町大字名護屋1931-3	0955-82-4905	H5.10.30
5　佐賀県立九州陶磁文化館	西松浦郡有田町中部乙3100-1	0955-43-3681	S55.11.1
〈市　立〉			
6　佐賀市大隈記念館	佐賀市水ヶ江2-11-11	0952-23-2891	S42.10.25
7　唐　津　城	唐津市東城内8-1	0955-72-5697	S41.9.30
8　唐津市歴史民俗資料館	唐津市海岸通7181	0955-75-1456	S54.4.15
9　唐津市古代の森会館	唐津市鏡1826-2	0955-77-2490	S59.10.20
10　唐津市末盧館	唐津市菜畑3359-2389	0955-73-3673	H2.10.1
11　多久市郷土史料館	多久市多久町1975	0952-75-3002	S55.3.31
12　多久市歴史民俗資料館	多久市多久町1975	0952-75-3002	S56.3.31
13　伊万里市歴史民俗資料館	伊万里市松島町73	0955-22-7105	S51.10.1
14　鹿島市民俗資料館	鹿島市古枝甲1448	09546-2-2749	S55.4.1
〈町　立〉			
15　基山町歴史民俗資料館	三養基郡基山町大字宮浦350-6	0942-92-0289	S57.1.31
16　上峰町ふる里学館	三養基郡上峰町大字坊所	0952-52-4934	H5.7.21
17　中林梧竹記念館	小城郡小城町253	0952-73-2111	S63.8.21
18　玄海町歴史民俗資料館	東松浦郡玄海町新田1809-22	0955-52-6688	H3.4.1
19　有田陶磁美術館	西松浦郡有田町三区1356	0955-42-3372	S29.4.27
20　有田町歴史民俗資料館	西松浦郡有田町鏡松391-1	0955-43-2678	S53.3.31
21　西有田町歴史民俗資料館	西松浦郡西有田町大木乙2208-1	0955-46-2111	S53.3.31
22　江北町郷土資料館	杵島郡江北町大字山口1651-1	0952-86-2111	S62.4.1
23　太良町歴史民俗資料館	藤津郡太良町大字多良1-1	09546-7-2139	S57.2.28
24　塩田町歴史民俗資料館	藤津郡塩田町大字馬場下甲1782	09546-6-3120	S62.2.28
〈私　立〉			
25　河村美術館	唐津市北城内6-5	0955-73-2868	H2.11.27
26　中冨記念　くすり博物館	鳥栖市神辺町288-1	0942-84-3334	H7.3.28
27　大平庵酒造資料館	多久市東多久町別府	0952-76-3293	S54.4.10
28　祐徳博物館	鹿島市古枝乙1686	09546-2-2151	S30.4.1
29　羊羹資料館	小城郡小城町上町	0952-72-2131	S59.3.31
30　有田ポーセリンパーク	西松浦郡有田町中部乙	0955-42-6286	H5.4.17
31　チャイナ・オン・ザ・パーク忠　次　館	西松浦郡西有田町原明	0955-46-3900	H1.9.1
32　志田焼資料館	塩田町大字久間西山	09546-6-2202	S53.12.1
33　小原記念美術館	藤津郡嬉野町大字下野甲	0954-43-1990	H2.1.2

行事案内

1月⇨3月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29		

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
※	25	26	27	28	29	30

カレンダー内は、□印は休館日

常設展

観覧料大人200(150)　大学150(100)※高校生以下は無料、(　)内20名以上団体

博物館

1号展	2号展	3号展	大展
1/2 自然史 佐賀の化石ほか 1/15	1/2 考古・歴史 佐賀藩の歴史ほか 1/15	1/2 美術・工芸 古代から近代まで 1/15	

(館内外の改修工事のため3/28(木)まで休館いたします。)

第18回 日展 佐賀会場

美術館

1号A展	2号展	3号展	4号展
1/2 彫刻 3/24	1/2 工芸鍋島緞通 ―もめんの花―4 2/12		
2/17 工芸鍋島緞通 ―もめんの花―5 3/24	2/17 百武・久米・岡田 二人展	2/17 ベルナール・ビュッフェ展	

日本絵画修復協力企画

ホノルル美術館名品展

1/2(火)～2/12(月)

大人大学生1,000(800)　中高生700(500)　小学生500(400)

※(　)内は前売・団体料金

第40回 佐賀大学教育学部美術・工芸科卒業制作展 2/20(火)～2/25(日) 大学教育学部
第20回 黄美会記念展 2/27(火)～3/3(日) 黄美会
第10回 総合美術ハチロク展 3/5(火)～3/10(日) ハチロク会
佐賀県書作家協会第20回展才 土肥春嶽遺墨展 3/12(火)～3/17(日) 佐賀県書作家協会
第20回 佐賀県書作家協会展 3/12(火)～3/17(日) 佐賀県書作家協会
第18回 二紀佐賀支部展 3/19(火)～3/24(日) 二紀佐賀支部

第18回 日展 佐賀会場　3/29(金)～4/21(日)西日本新聞社

大人 1,100(800)　大高生600(400)　中小生400(300)

※(　)内は前売・団体料金

展覧会

枠内に明記する以外は無料

日誌

佐賀県立美術館所蔵品巡回展「秋の美術館」

全期：平成7年10月27日(金)～11月12日(月)

会場：祐徳博物館　観覧者数：2,619人

知られざるふるさとの自然史

大集合！佐賀平野と有明海の生きものたち

会期：平成7年9月29日(金)～11月5日(日)

観覧者数：13,292名

10月8日(日)の記念講演会

佐賀県立博物館・美術館報　第112号　　平成8年2月28日
編集発行　佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
〒840　佐賀市城内1-15-23　TEL0952・24・3947　FAX0952・25・7006
印　　刷　日之出印刷株式会社